

# 提言

## 「戦争の話」響かぬ若者」

た

私としては、驚くに至らなかつた。大変なことがあつた地域の人、よその大変なことを注視できなくて当然と思つたら、70年前の原爆投下の話をいまシリア

の銀行や駅前のショッピングモールも倒産する。そんな情景を見てきた彼らは、安定成長を日常と感じてきた大人たちより、もはるかに、諸行無常のはかなさを体感しているに違いない。

続いたため。それが過ぎ安定成長になった1980年代以降、先進各国でトップ1割が占める財は、国富の約3分の2に及んでいるのだと。

「君たちみたいに甘いやかされて育つた世代が大人になる頃の世の中が心配だ」と嘆く中高年は多いけれど、いまの子たちは温室でぬくぬくと生きていて、という見方を割いて分析した通り、格差は拡大し、約

半数の国民が楽ではない生活を強いられている。曹洞宗「現代にふさわしい教団の理念、教団のあり方に関する分科会」委員。生きづらさに向きあう任意団体へひとなみ

寺社がまず、大人たちの色眼鏡をはずす役割を担うべきなのだ。すぐれ・けいこ氏  
ファイナンシャルプランナー

### 勝 桂子

# 大人の偏見正すのは寺社の役割

をいまシリア

で、大変な時代に生きて

フランスの経済学者トマ・ピケティ教授は著書『21世紀の資本』で、資本主義と民主主義が同義

が示した80年代以降の事実を直観として鋭敏に感じ取っているから、70年

のものが違っているのか。人の話を聞こうとしないのは、競争は昭和の頃より激化し日々が苦しいの

したね。でもウチは今晩

いるからではないか、と

本主義と民主主義が同義

前の戦争のことを耳にし

固定観念を壊すところに

に、「戦争のない幸せな

焼かれるかもしれない

生まれながらのデフレ

でなかったことを示し

ても対岸の火事のように

ある。「孫たちに戦争体

時代生まれ」との色

です」ということにな

で親はいつでもお金があ

い、ないと言っている。

大学さえ出たら終身雇用

よっに見えたのは、戦後

いからかもしれない。競争主義の対極にある開

いだろ。

そこで思ったことは、

大学さえ出たら終身雇用

よっに見えたのは、戦後

いからかもしれない。

競争主義の対極にある開

だ。

大学さえ出たら終身雇用

よっに見えたのは、戦後

いからかもしれない。

競争主義の対極にある開

いからかもしれない。

# 提言

## いいおじいさん復活

あーとおさめてしまっ好  
々爺もいた。

ピケティは『21世紀の  
資本』で、1980年代  
以降富裕各国での格差は

着実にひろが

り、トップ10

%が国富の3

分の2を独占

している

述べた。19世紀のよう

に、トップ10%が国富の

9割を独占しているより

マシなのだろうか。い

や、当時は残り1割の富

を90%が仲良く分け合っ

%の下に60%の中流階級

「例外」として社会から  
はじき出し、努力できな  
かった彼らに自分たちの  
富を決して分け与えよう  
としない。死後において

（※）そのため最下層の  
人々は、1世紀前9割の  
平民が持っていた余力す  
いま相続や遺言の相談

目減りさせずにおけます

か?」「相続税を取られ

ないようにするにはどう

すればいいですか?」

われわれ士業者も遠ま

わりに、お墓へ紙幣は持

つていかれないことを伝

える努力はする。配偶者

るから、手離せないの

だ。自分の死の始末につ

いて、信託銀行やNPO

も完全には信頼できない

財団とかNPOとか、寄  
附したい先はありません  
か」と提案しても、「そ  
んなところはいい!」。

つまり、蓄財した金額  
自体が自分の生きた証し  
（生涯成績）になってい

る場所だからだ。ただ、

こうした人々に「知足

の例で、「トップ10%、

は得られない。

まずは不安に苦

悩める人々を、

菩薩の心でジッ

と見守ることが

らと思う。彼らは、生老

病死が当たり前ではな

く例外的なものと思い込

んでおり、子どもを亡く

いない家から芥子の実  
を「に代わる気づきの言  
葉を、終活に奔走する中  
高年は心待ちにしてい

※ピケティ『21世紀の資  
本』においてはアメリカ

の間層40%、持たざる最

下層50%とされている。

これを筆者が日本の感覚

に置き換えた数字（論拠

・・・ワーキングプア110

0万人＋生活保護受給者

78万人＋年金生活者のう

ち1階部分の国民年金の

みまたは無受給者の数推

計約1500万人。これ

に受給していても借金に

追われているなどを加え

平成になってからの四  
半世紀で、昔話に出てく  
る「いいおじいさん・お  
ばあさん」を見つけたと  
とができなくなったと、  
私は感じている。20年  
前、いつもニコニコ笑っ  
てのんびり年齢を重ねる  
タバコ屋のおばあちゃん  
が、あちこちの町角にい  
た。道ゆく子どもが喧嘩  
をしていれば縁側へ招い  
て飴玉を渡し、「まあま

ファイナンシャルプランナー

勝 桂子 ◆

## 悩める人を菩薩の心で観じよう

から失くしている。  
また、台頭した中産階  
級は熾烈な競争に勝つこ  
とで富を得ているので、  
蓄財を自分たちの努力の  
結果と信じている。家族  
の生老病などで競争の歯  
車に乗れなかった人を  
常でない。「どうしたら  
え、「何か世話になった  
さん・おばあさんを復活

# 提言

ピケティ教授は、10%の上層階級の富の独占状態に警鐘を鳴らした。しかし、上位10%が富の3分の2を独占していることよりも、隣人が60%の中流階級なのか30%の持たざる最下層なのかかわかりづらく、ため、わかり合いや共感ができなくなったことのほうに、私

ファイナンシャルプランナー

## 失われた「分かち合う場」

は深刻さを感じる。

前回、いいおじいさん 悩をわかち合うこともでき

・おばあさんが減った話

をした。その根本原因 翻って今は、生死に

も、わかち合う

機会のない

にあると思

う。

1割の貴族

と9割の庶民しかいな

った中世、9割の庶民の

間に格差はなかった。隣

も同じ生活状況だから、

井戸端会議で悩みを聞き

合い、味噌や醤油を貸し

借りし合い、農作業も協

かし合い、生老病死の苦

い価値観の中では、ある

いは戦地よりも熾烈な争

いが起きている。

見える傷なら誰しも放

置はできないし、隣人が

着な理由」も、そこにあ

ることが苦手だ。寺檀関

係が円滑だった頃には、

村の皆が菩提寺に所属し

ていたから自分も所属し

ていた彼らが今、「葬儀に

お坊さんは要らない」と

言いい、自由葬だ、無宗教

葬だと主張している。

が町に戻るための第一歩

## 勝 桂子 ③

# 寺社が提供、再び地域の核に

武器のない「平和」状態 くの人は時計とにらめっ のささいな悩みを共有で 徒は車で数十分、数時間 散った檀信徒を囲い込む

かもしれないが、見えな こをして半ば迷惑そう きない膠着したこの社会 の距離にドーナツ化して ことをやめ、ふたたび地

い価値観の中では、ある に、会社や学校へ遅刻の を、誰が解いてゆくの いった。加えて、死の舞 域の核となって信徒を組

いは戦地よりも熾烈な争 連絡をするのだ。第1回 か。答えは、寺社にあ 台が自宅と寺から、病院 織し直す必要がある。そ

いが起きている。 で述べた「平成の若者が 70年前の戦争の話に無頓 日本人は、囲い込まれ とセレモニーホールへと

見える傷なら誰しも放 置はできないし、隣人が 着な理由」も、そこにあ ることが苦手だ。寺檀関 移り、葬儀の主導権が寺

置はできないし、隣人が 着な理由」も、そこにあ ることが苦手だ。寺檀関 から葬儀社へバトンタッ する者にも持たざる者に

ちされてゆく中 で、檀信徒は年 間管理費と法要 べて語りえ、わかち合え 等しく訪れる」ことを伝

て引き留められ ている。まさに「囲い込 ば、持ちすぎた人も財を 手離せるようになり、代

わりの感謝を受け取るこ とができる。いいおじい さん・おばあさんの笑顔

が町に戻るための第一歩 が、そこにある。

血まみれで事切れていた ら手も合わせるだろう。 話を戻そう。隣人や家 族が生きづらさを抱え苦

しいから自分も所属し ているから自分も所属し ているから自分も所属し

ていた彼らが今、「葬儀に お坊さんは要らない」と 言いい、自由葬だ、無宗教

葬だと主張している。 が町に戻るための第一歩 が、そこにある。

故で列車が遅れます」と 悩しているも、上昇し続 いていたわけで、檀家の誰 お坊さんは要らない」と

言いい、自由葬だ、無宗教 葬だと主張している。 が町に戻るための第一歩 が、そこにある。

けるエスカレーターから も、「囲い込まれた」意 識はなかったと思う。 葬だと主張している。 が町に戻るための第一歩



# 提言

90歳前後にして億という財産を持っていても、それを何に活用すべきかわからず、相続時に自分の遺産を誰に譲るべきかで悩み続け夜も眠れない人がいる。このような人と、つましく暮らせるだけの質素な家屋とわずかのゆししか持たないけれど、日々お天道さまに感

ファイナンシャルプランナー

## 寺社が経済循環の縦糸に

勝 桂子 ⑤

謝し夫婦いたわり合っている昔話に出てくるいいおじいさん・おばあさん。とだつたら、目に見えない富の量は、後者のほうがはるかに多いと私は思う。

さしたる

財を持っていなくても、まさかのときは助け合えるしお互いさまと言え。それが、半世紀前までわが国全土にあった固有の富であり、誇るべき美徳だった。何百年と静

円は払ってほしかった」こは、「競争へのマイナと檀家総代に漏らすなと、市民の財布の中身を探るようなことはもってのほか。多寡によらず、ただただた布施がご縁と感謝し、豊かな心で訪れる人々と接してゆくこと

を理由に敬遠されるようではおかしい。気持ちよく大金を布施してくれる人がいたら、その人たちは「金銭で買えない安堵感」を求めていると知るべきだ。お布施の額の多寡順に並んだ

つても、即座に語り終るとは難しい。しかし寺社なら、まずは募金などで富を巡らせる緩衝材となり、異なる層の人どうし互いを理解する素地をつ

# 「見えざる富」増やしてほしい

は、まずお寺が、財の多寡によらず豊かな心を持つてるといふことを実証する。また、シリーズを通して、うつつ、ひきこもり、ニート、ターミナル、自己死、グリーンケア等、こ

きる苦悩をわかち合える場所である。「万札を払う余裕がないから立ち寄り木札の上位に刻まれることと、彼らの虚栄心を満

の目と心を開かせる仕事を、宗教者は成すべきなのだ。トップ10%とミドル60%と持たざる30%をただ同じ場に呼び寄せ「わかち合いましよう」と言

(おわり)

士也氏